

3. シンポジウム「リテラシー研究の最前線 ―西欧中世史から―」 (九州歴史科学研究会と共催)

日程：2008年12月6日（土）14時から

場所：西南学院大学学術研究所大会議室

共通テーマ「リテラシー研究の最前線 ―西欧中世史から―」

報告：

岡崎 敦「リテラシー研究の現在 ―西欧中世史から―」

梅津教孝「中世初期のリテラシーと、初期カロリング王文書を書くこと・
読むこと」

岩波敦子「史料学からリテラシー研究へ

―ドイツ・ミュンスター中世研究所の活動を中心に―」

永嶋哲也「コメント」

九州歴史科学研究会との共催で、リテラシー研究について西欧中世史学界の動向を紹介し、領域横断的に検討する学際的シンポジウムを開催した。

リテラシーをめぐる議論は、現代歴史学の関心の十字路に位置すると考えることができよう。議論の展開自体が、リテラシーの定義と機能をめぐる権力配置自体にかかわっているとすら見えるからである。そこでは、テクノロジーとしての文字やメディアの位置づけから、受容問題、「我がものとする利用」をへて、コミュニケーション論にいたる広大な射程が開けている。とりわけ西欧中世は、以下の二重の意味で、特に興味深い研究対象であり、事実、多くの重要な問題が提起されてきた。この時期は、第一に、無文字社会でも、「全面的な文字化」社会でもなく、必然的に、口頭所作と文字の両方を考慮に入れねばならない。第二に、文字の世界においては、規範語として特権的な地位にあったラテン語に、「話し言葉」でしかなかった諸俗語が挑戦する過程として現れるのである。最後に、口頭所作、パフォーマンスの世界についても、基本的には「書かれたもの情報」を史料（＝過去の痕跡）として認識するしかない西欧中世史研究においては、方法論的にも、史料情報認識というレフェルの史料論上の諸問題が、もっとも先鋭に意識されねばならないことを強調しておきたい。

研究会では、近年の研究状況を概観する序論報告ののち、中世初期と盛期・末期について、個別報告があてられ、最後に、西欧中世哲学史研究者からコメントが行われた。梅津報告は、マキテリク学派をはじめとする中世初期についての研究動向を概観しながらも、

とりわけラテン語リテラシーをめぐる諸問題に肉薄する。ここでは、王文書テキストの「書き」と「読み」の具体相が焦点となろう。岩波報告は、20世紀後半のもっとも重要な共同研究の一つであった、ミュンスター大学「実践的リテラシー」プロジェクトの、いわば解釈学的紹介である。同時に、西欧中世史におけるリテラシー研究の代名詞とも言える、このプロジェクトに当時現場で立ち会っていた証人による、回顧と総括という意味も有する。

以下は、各報告者が、当日の報告をもとに、あらたに書き下ろしたものである。報告後行われたコメントは、主として各報告者に対する質問からなっていたので、特に原稿として掲載しなかったが、シンポジウム後半の総合討論における活発な議論の前提を提供したことを特に付け加えておきたい。他方、中世リテラシー研究については、中世盛期・末期イングランド領域に関して、伝統的に重要な業績が積み重ねられてきたことを念頭に、この時期の専門家によるコメント原稿があらたも準備された。